

# ペンギン、空を飛ぶ

伊東剛史

四月一日はエイプリルフールということで、世界各地の新聞やテレビでは「本当のような嘘」が伝えられ、できの良い作り話はそれ自体がニュースとしてとりあげられることもある。まだ白黒テレビの時代にBBCが制作した「スパゲッティのなる木」は、この種のほら話の古典的名作である。

二〇〇八年の、やはりBBC制作の「空飛ぶペンギン」も、これに匹敵する名作だと思う。最初に南極にいるペンギンの群れが映る。そこに登場した解説者が、このペンギンは最近発見された希少種で、他のペンギンにはできないことができる、と述べる。すると、ペンギンたちが次々と走り出し、何度か跳躍を繰り返して離陸していく。胴が重そうな滑空姿勢は、マガモを思い出させる。そういえばマガモは渡り鳥だった。そんな連想が浮かぶタイミングで場面が切り替わり、南米の熱帯雨林を俯瞰した景色が眼前に広

がる。そこに先ほどのペンギンの群れが飛来する。毎冬、ペンギンたちは何千マイルも飛んでこの地を訪れ、日光浴をして過ごすのだという。最後に、黄色い大きなくちばしをもつオニオオハシの横顔が映る。オニオオハシは次々と森林に降り立つペンギンに気がついたようだ。そして、一羽のペンギンが力強い日差しを背に受け、まるで空挺隊員のように林冠の合間に降下してくる場面で映像が終わる。もしペンギンが空を飛べたとしたら、色鮮やかな鳥たちとランデヴーを夢見るものなのだろうか。

ところで、日本最北の動物園である旭山動物園のペンギン展示のコンセプトは、「空飛ぶペンギン」である。ペンギン館内にある水中トンネルでは、頭上を泳ぐペンギンが空を飛んでいるかのように見える。トンネルを抜けた先の部屋の壁には、色とりどりの鳥とともに山野を渡るペンギンが描かれ、天井を見上げればモビールのペンギンが宙に

舞う。ギフトショップで売られていたカプセルトイの中には、「水中を飛翔するペンギン」と名づけられたスノードームがあった。軽く揺らしてやれば、ペンギンが風花の中を旋回する幻想的な情景を愛でることができ。なぜ、ペンギンはこんなにも空を飛びたいと願うのだろうか。なぜ、人はこんなにもペンギンに空を飛んで欲しいと願うのだろうか。

旭山動物園を再建した小菅正夫によれば、水中トンネルは床の部分まで透明なアクリルを用いて、下を向いても水槽が見られるように工夫してある。そのためトンネルは、どちらを向いても青い視界が得られる。この工夫のおかげで、ペンギンが泳ぐ姿を足下の視界に捉えると、上空を飛翔しているかのような浮遊感が得られる。水中トンネルは、水槽の中のペンギンをただ観察するための場所ではない。それは水の中を飛ぶように泳ぐペンギンに取り囲まれて、自らが空を飛ぶ夢を叶えるための場所なのだ。

人は鳥にはなれない。しかし、もしペンギンが空を飛べるのだとしたら、人もまたペンギンになって飛翔したとしてもおかしくはない。絶対不可能だと思えることは、ふたつの不可能に分けてしまえばよい。そうすれば、もし片方が可能なら、もう片方も可能かもしれないという想像が翼を広げてくれる。

水中トンネルの中でペンギンのように両手を広げ、空を飛んでいるかのように振る舞う子供たちが見えた。青空を自由に飛び回りたいという願いが、いとも簡単に成就してしまったように思えた。ありえないことが「嘘のような本当」になった瞬間だった。

いとう・たかし 総合国際学研究院准教授 動物史

## 文献案内

- 小菅正夫、岩野俊郎『戦う動物園——旭山動物園と到津の森公園の物語』中公新書、二〇〇六年
- Hilda Kean and Philip Howell (eds), *The Routledge Companion to Animal-Human History*. London: Routledge, 2018
- Tracy McDonald and Daniel Vandersommers (eds), *Zoo Studies: A New Humanities*. Montreal: McGill-Queen's UP, 2019

